



僕の嫁の、物騒な 嫁入り事情と大魔獣 1

ALPHAPOLE L I G H T

かっぱ同盟
Kappa-Doumei

アルファライト文庫 

サフラナ

グラスス家に
長く仕える、
侍女のお婆さん。

オリヴィア・レッドバルト

リノの同僚。しっかり者で
夫のジェラルに厳しい。

ジェラル・レッドバルト

リノの友人。ポジティブで
お人好し、加えて愛妻家。

マルゴット・プロロフィーナ

風を司る大魔獣。
正体は巨大な白狼。

サンドリア・
レカクーダ

砂と水を司る大魔獣。
正体は青い牡鹿。

レーン・バロナーム

わずか十四歳にして国家
庭師免許を持つ天才少年。

セーラ

グラスス家と長い付き合いが
ある町医者者の娘。

ベルルロット・グラスス

三匹の大魔獣を従える、
旧魔王の娘。地下牢に
閉じ込められていたため、
無垢で世間知らず。

リノフリード・グラスス

牙えな^{ほつなく}い没落貴族の主人公。
王からの命を受け、
ベルルを嫁に迎える。

1 魔王の娘

これはリーズオリア王国王宮魔術師であるこの僕、リノフリード・グラススが、国王の指示により妻に迎えた訳あり娘と送る、数奇な人生の物語。

僕の妻、ベルルロット・グラススは、十二年前に打ち倒された東の最果ての、旧魔王の娘であった。

なぜ僕がこの訳ありの娘を嫁に貰わねばならなかったかと言うと、それは単純に国王から命令された為である。

没落の一途を辿るグラスス家に嫁入りしたいと言う女性なんて居ないだろうと、半ば結婚を諦めていた僕は、その命令に素直に従った。これが僕の運命なのだ。

王宮は彼女を娶ることを条件に、グラスス家に様々な援助を用意してくれた。

しかしどうして国王は、この僕に命じられたのか。その理由を知るのは、僕が彼女と結婚してから随分後のことになる。

ただ一つ言えるのは、僕にとってベルルは、ただ一人のかけがえない妻であったということだ。



「グラススの旦那様、こちらでございます」

白髪で腰の曲がった胡散莫い年寄りの看守に連れられ、僕は王宮の地下牢にやって来た。ひんやりとしていて涼しい。残暑とはいえ、まだまだ暑い地上の熱気が嘘のようだ。

こんな所に牢があるなんて知らなかった。しかもここに一人の女性が十二年の間、閉じ込められてきたらしい。

「ベルル様、昨日お話しした、旦那様ですよ。ベルル様はこの方の妻となるのです」

老人は錆び付いた牢屋の奥に広がる暗闇に向かって、言葉を投げかけた。

すると鎖の音がチャリチャリと軽快に鳴って、人影がこちらに駆けてくる。

だんだんと近づくその音に緊張し、思わず僕は息を呑んだ。

「まあ、その人が私の旦那様なの？ 私、ここから出られるのね!!」

なんて可愛らしい声だろう。

しかし現れたその娘は、服は汚れてポロポロ、真っ黒の髪は伸びに伸びて顔にまでかか

り、表情がよく見えないという、非常にみすばらしい姿だった。

これが、かつて「世界の節目」と呼ばれる東の最果てを治めた旧魔王の娘だということのか。

「あなた、お名前は？」

「……リノフリード・グラススだ」

名乗る以外に気の利いた言葉が出てこない僕。

つまらない男だと、何度王宮の女性たちに噂されたか分からない。

しかしそう簡単に、人間愉快になれるものか。

娘の口元は、何となく笑って見えた。長い髪のせいで、定かではないが。

よくよく見ると、両足が鎖で繋がれている。牢屋なのにここまでするののかと、僕は彼女を哀れに思った。

「老人、そろそろ牢屋を開け、彼女の足の鎖を外してやってくれないか。これでは家に連れて帰ることが出来ないだろう」

「……ひひひ、旦那様……驚いて腰を抜かすかもしれませんけどね」

「……………」

老人は意味不明なことを言う。

ベルルと言う少女は「早く早く!!」と老人を急かしながら、牢屋の鉄格子を握って飛び跳ねていた。

無邪氣にピョンピョンと跳ねる姿はいかにも幼い少女のようで、少し心配になる。もう十六歳と聞いていたのだが。

娘が飛び跳ねる度に、鎖のチャリチャリという高い音が地下牢に響く。鉄格子が開けられ、僕と老人はその牢屋の中へ入った。古い鉄が軋む音は、何て耳障りなんだろうか。

「旦那様が鎖を外されますか?」

「……あ、ああ」

老人は僕に、金色の鍵を渡した。素直に受け取ってしゃがみ込むと、彼女の足をそと取る。細い足首にはしっかりと鎖の留め金が固定されており、青い痣が出来ていて驚いた。

「早く外してちょうだいっ」

彼女が急かす。僕はちらりと彼女を見て、すぐに鍵を鍵穴に差し込み、回す。

「……!?」

その瞬間、とてつもない悪寒が背筋を走った。

何かに見られている気配が、上からも下からも感じられる気がする。黒い大きな影のような、得体の知れない不可視の存在。

まるで、獣の気配のような……

「何だ……これは……」

「ひひひ、旦那様……ベルル様は旧魔王の娘ですよ。十二年前、我が国家の勇者に討ち取られし旧魔王は、死ぬ間際、一人娘に三匹の大魔獣の契約を移したと言います……ひひひ、物騒な嫁入り道具と言うか何と言うか……嫁入り大魔獣? ひひひ……」

「……え?」

聞いてないんですけどそんなこと。

こんな爆弾を抱えた娘を僕に嫁がせるとは、国王の気は確かか。

どこからともなく邪悪な視線を感じる。東の最果ての魔王は十匹の大魔獣と契約していたと聞いたことがあるが、そのうちの三匹のものだろうか。

いやはや、謎だらけの花嫁だ。

「もう、ダメよみんな。この人は私の旦那様になる人なの。大人しくしていなさい!」
ベルルという少女は、闇の濃い方へ声をかけた。僕には見えない何かと話している。

すると、僕に向けられていた邪悪な視線が、スッと消えてしまった。

「ふふふ、みんないい子なのよ」

「……」

ベルルは固まってしまった僕にそう言った。

大魔獣が三匹もこの娘に従っていると。やはりこう見えても魔王の娘ということか。分かっている。

訳ありなのは、分かっていたはずだ。

国王の密命である時点で、それは覚悟していたはずだ。

それでも僕はこの娘を娶ると、国王に申し出たのだ。今更引き返せない。

王宮の地下を出た後、裏門にこっそり用意された馬車に彼女を乗せ、僕らはグラスシ家の館へ向かった。

グラスシ家の館は、王都から少し外れた丘の上にある。昔は沢山の人が住んでいたが、今は僕と使用人の老夫婦と庭師しか居ない。僕の父と母は数年前、とある事故で亡くなった。それがグラスシ家の没落の大きなきっかけとなったのだ。

「わああ、あれが私の住むお屋敷なの？ 旦那様」

ベルルが馬車から身を乗り出し、丘の上の大きな屋敷を指さしている。長い髪が僕の足下まで流れてきて、踏んでしまいそうになるので気が気でない。

「君……席に座りなさい。危ないぞ」

僕が淡々と注意すると、彼女はコクンと頷いて、向かいの席に座った。

そしてどこかムツとしたように、「違いわ」と言う。

「ベルルロットよ、旦那様。私の名前」

「……」

「ベルルと呼んでちょうだい」

「……え」

「ねえ旦那様、名前で呼んで……？」

「……わ、分かった……ベルル」

驚いた。彼女からこのような要求があるとは思わなかった。

しかし、きっかけを与えられると今後彼女の名を呼びやすくなるので、こちらとしてはありがたい。

「ベルル、館に戻ったらまず身の回りを整えよう。髪もそう長くは、色々と不都合だろう」

「……そうなの？」

「服もみずばらしいものは嫌だろう。我が家にサフラナという侍女が居る。彼女に世話をしてもらおうといい」

彼女は自分のボロボロの服を摘んで、首を傾げた。

地下牢での生活が長過ぎて、そういう感覚が麻痺しているのか。

僕は小さくため息をついた。

この訳ありで、世間知らずの、小さくて細くみずばらしい娘が、僕の妻となるのだ。これからが大変だぞ、と。

今日この日、グラスシ家の館に、僕の花嫁がやって来た。



「まあまあよくぞおいでくださいました、奥様。私はグラスシ家の侍女をしておりますサフラナと申します」

館に着くや否や、侍女のサフラナが待っていましたとばかりに、瞳をキラキラさせて現れた。彼女は僕の父の代からグラスシ家に仕えている、いわゆる「ばあや」だった。

父と母が事故で死んでからも、ずっと僕の面倒を見てくれた人だ。僕は家族だと思っている。

本当に有能な侍女なのに、こんな没落の一途を辿る一族にずっと留まってくれている。

彼女にはベルルが旧魔王の娘だと聞かせていたが、それが何かと言わんばかりにベルルを歓迎している。ベルルのちよつと普通じゃない風貌ふうぼうを見ても、笑顔を崩すことはなかった。

まあ、もともとパワフルなばあさんだけど。

「さあさ奥様、こちらへどうぞ。王宮の地下に閉じ込められていたとは、なんてお可哀想かわいそうなことでしょう。さ、お湯を浴びて、服を着替えましょう。髪も整えましょう」

「……あなたはサフラナと言うの？ 私、奥様なの？」

「そうですよ。グラスシ家は今、リノ坊ちゃんが当主ですから、ベルル様は奥様になるのです」
「……奥様……」

彼女は不安げに僕の方を見上げていた。髪に隠れて瞳は全く見えないが、多分。

僕が「大丈夫だ、彼女の言う通りにしろ」と言うと、彼女はコクンと頷いて、サフラナの方へ小さな歩幅で歩いて進んだ。

今まで重い鎖で繋がれていたの、大きな歩幅で歩けないのかもしれない。彼女の歩く姿を見て何となくそう思った。

サフラナは嬉しそうにベルルを連れて、居間を出て行く。まあ彼女に任せておけば、大丈夫だろう。

僕は初めてのことばかりで緊張していたのもあり、少し疲れていた。

広くて静かなグラスシ家の屋敷の居間で、一息つく。

あのような魔獣を従える魔王の娘が、僕の妻になるとは思ってもみなかった。

しかし、世の中何があるのかなんて全く分からないのだから、逆に考えれば、こういうことも「あり」なのかもしれない。

「坊ちゃん、リノ坊ちゃん……旦那様!! 起きてくださいいな、こんな所で寝てしまっ

てっ!! 本当に、子供の時からちつとも変わらない……」
 サフラナがガミガミ言う声で、僕は目を覚ました。ここで寝ていると、いつも彼女に怒られる。

一時ぼんやりしていたが、徐々に視界が鮮明になって、そして……

「……」

目を閉じることが出来なくなった。

目の前には見知らぬ美少女が居たからだ。

「……誰だ」

黒く長い、整えられた巻き毛。白い肌。ほんのり紅をさした唇。それに宝石のように美しい青い瞳。僕の母のものだった地味な色のドレスを着ているが、その美しさは少しも減じてはいない。

信じられないが、これがベルルだというのか。

痩せているのでドレスが大きく見えるものの、その佇まいはとても上品で、先ほどとはまるで別人のようだ。

「当然です坊ちゃん。旧魔王は見目麗しい美男子だと言われていましたし、その寵愛を受けていた奥方も絶世の美女であったと聞いたことがありますもの」

サフラナは自分のことのように自慢げだ。



ベルルは大きな瞳でパチパチと二度程瞬きして、ニコリと口元に弧を描いた。
「……………どう、旦那様?」

顔を近づけ微笑むその少女に慌ててしまつて、僕は思わず立ち上がる。

ここ最近は何ぞ美女と関わることもなかったし、しかも魔王の娘という恐ろしい身の上や、あのみすばらしい姿からのこのギャップだ。眼鏡を取ると美少女、以上にびつくり。これは卑怯だ。そう言つても許される。

「ああ……………よ、よく……………出来ている」

何を言っているんだ僕は。もつと気の利いた褒め言葉は出てこなかったのか。

サフラナの、とても残念そうなジトツとした表情が視界に入る。

しかしベルルは、なぜかとても喜んだ。

「うふふ、やったわ。旦那様に褒められたわ」

くるりと回つてドレスを揺らし、無邪気に笑っている。

このように美しい少女だとは思わなかった。どんな容姿でも、彼女を迎えることに変わりはないと覚悟していたが、これは予想していなかった。

「しかし坊ちゃん、大奥様の服では、やはり少し大きいようです。私が仕立て直してもよいのですが」

「い、いや……………王宮から少し援助が出ている。明日……………ベルルに必要な物を買に行こう。

服や靴を、一式」

「まあ、それがよろしいでしょう。坊ちゃん、明日はお休みなのでしょう?」

「あ、ああ」

僕はゴホンと咳払いをすると、ベルルの前にちゃんと立つて、彼女の顔をしっかりと見た。

やはり若く美しく、どこかあどけない。

「ベルル、明日王都へ出て、必要な物を揃えよう。欲しい物があつたら言ってくれ」

「……………?」

彼女は首を傾げた。そして、口に手を当てクスクスと笑う。

「欲しい物なんて特にないわ。だって、あの地下の牢屋から出られたんですもの」

「……………」

「私、ずっとお祈りしていたの。いつか、誰かが私を、ここから出してくれますように」
「……………」

僕は彼女の笑顔に、何とも複雑な気分になった。

ただ王に命じられ、我がグラス家家の再興の足がかりになるかもしれないという下心を抱きつつ、彼女を妻に迎えただけの話だ。

ドレスに隠れてしまったが、足首にはまだ鎖の留め金で出来た痣があるのだろうか。

考えてみれば、父と母を殺され幼いうちから鎖に繋がれ、あんな暗い場所に閉じ込めら

れていただなんて、本当に哀れな娘だ。ただ、魔王の娘であったというだけで、それなのに、こんなに明るく振る舞えるのはなぜだろう。

ここ最近、女性に興味を持ってないでいる枯れきった僕だが、妻に迎えたベルルのことは嫌でも気になる。沢山の事情や因果因縁を、細い体中にくくりつけた娘なのだ。

湧き出てくる興味は、魔法の研究中にふと何かを発見した時の心境に近い。

「グラススの館へ……ようこそ、ベルル」

一度口をぎゅつとつぐんだ後、僕は頑張つて、少しだけ微笑んでそう言った。

すると彼女は大きな瞳を、もつと大きく見開いて、とても嬉しそうにコクンと頷いたのだ。

お互いに、少しずつ知っていく何かがきつとあるんだろう。

そう思った。



眠れない。

眠れる訳がない。

隣で、今日初めて出会った少女がやすやすや寝ているのだから。

そりゃあ夫婦というのは同じ部屋で、同じベッドで寝るものなのかもしれないが。

「……」

僕には学生時代、婚約者が居た。魔法学院で共に研鑽を積む魔女だった。

幼い時に親同士が決めた相手だったが、そんなことは関係なく、僕はその人が好きだった。

しかし父と母が事故で死ぬと、以前からあった親戚とのいざこざが表面化し、財産をあらゆる方法で奪われ、グラスス家は衰退してしまった。

力と財産をなくしたグラスス家の息子と、我が子を結婚させたがる親は居ない。結局婚約者だった彼女は僕との婚約を破棄し、当時力を持っていた魔術一門の男に見初められ、その男と婚約した。

もう随分昔のことのように思える。

その時の僕はまだ若く、色々なことが重なり過ぎて人生に光を見出せずにいたが、その後王宮魔術師として働く中で、徐々に力を認められるようになってきた。

自分とベルルとの結婚の話が舞い込んで来たのも、王宮で地道に結果を出して来たからだ、勝手に思い込んでいる。

「ねえ、旦那様、起きてらっしゃる？」

隣から小さな声が聞こえ、驚いた。

ベルルはもうすっかり寝ていると思っていたから。

「な、何だ」

「ベッドがふかふかして眠れないの。どうしよう」

「……」

「私、床で寝てもいいかしら」

「それは駄目だ」

即答ものだ。当然、そんなことはさせられない。

もしそれを許そうものなら、明日サフラナに何と言われるか。

「……絶対？」

「絶対だ。何が何でもだ」

「でもね旦那様、私ずっと冷たい牢屋の床で、布団一枚で眠っていたのよ。こんな体の埋もれちゃうベッドじゃ、眠れっこないわ」

魔王の城では床で寝ていた訳でもないだろうに。あまりに幼い頃のことと、覚えていないのだろうか。

「……仕方がないな」

僕は起き上がって、ランプの灯を点けた。そのままベッドを出て隣の書斎へ向かう。

「どこへ行くの？ ま、待って……っ」

するとベルルまでベッドを出て、てくてくついて来た。

「おいおい、ベッドで待っていてくれていいのに」

「……でも」

「薬を取りに来ただけだ。寝付きの良くなる薬草の茶を飲むといい。僕は王宮で魔法薬を研究している身だ。良いものを持っている」

「……薬草のお茶？」

「ああ。グラス家の庭で採れた薬草の茶だ」

棚に並べられた瓶から、干した薬草を数種類選んで取り出し、机の上にある天秤てんびんに載せた。机の上に置いていた短めの杖を持って、宙に魔法式まほうしきをさらさらと書く。すると天秤に載った干し草が宙を舞いながら細かく砕けていく。

「わあ、魔法ね」

「ああ……薬草に夜の女神の術式を組み込んだんだ」

「凄い凄い!! 綺麗ね!!」

さっきまで枯れ葉の色をしていた薬草は、再び天秤の皿に戻った時には、キラキラした緑色の粉になっていた。

これは王族や貴族の者たちに愛用される魔法薬の一つだ。市販だと結構高かったりする。「ほら、ベッドに戻って待っていなさい。僕はお茶をいれてくるから」

「……」

「いいね」
「はい」

彼女は洪々頷くと、ベッドに戻っていった。

僕は広い屋敷の台所まで行って一人茶を沸かし、カップを二つ用意する。どうせ僕も寝られなかったのだから、ちょうどよかった。

「しかし……若い娘は、こんな苦い茶なんて嫌がるかな」

ふとそのように思い至り、角砂糖とミルクも一応持っていく。

「待たせたな……」

「……わあ、凄く良い匂いね」

「匂いの強い薬草だからな」

僕は相変わらず面白くないことを言って、茶のカップを手渡す。

彼女は特に苦みを気にしなかったものの、角砂糖とミルクを入れたものも飲みたがった。するとやはり、甘い方が気に入ったようだった。

彼女はベッドの上で、僕は側の椅子に座って、真夜中にお茶を飲む。なんとも不思議な気分だった。

温かい茶の品のある香りは、こんな状況でも落ち着きを与えてくれる。

「ベルル、一つ聞いてもいいか」

「……？」

「君のいたあの地下牢……あの場所を訪れる者はいたのか？ その、あの老人以外に」

「……ほとんどいなかったわ。国王様は、あまり私のことを良く思っていないかったみたい」

「それは……まあ、そうかもしれないが」

国王のみならず、この世界の者は、旧魔王の娘というものに良い印象を持たないのではないだろうか。それは僕も同様だった。

そもそも前の魔王に娘がいたなんて知らなかった。

十二年前に行われた、こちら一帯の国を挙げての魔王討伐の折、旧魔王関係者は皆処刑されたというのが通説であったから。

ベルルはカップを両手で持って、少しずつお茶を飲んでいる。

「ねえ旦那様、旦那様はどうして私をお嫁にしようと思ったの？」

「……え」

いきなり答えに困る質問をされた。

ベルルはクスクスと笑っている。

「国王様に命令されたの？ 別にいいのよ。知っているもの」

「……」

「聞いたことがあるの。いつか私は、どこかの誰かと結婚して、子供を産まなければなら
ないって。その為に、私だけ生かされたんだって」

僕は思わずお茶を噴きこぼしそうになった。

色々と、色々と衝撃で。彼女はそれがどういことなのか、分かっているのだろうか。

「それ、誰が言ったんだ？」

「バジリよ。あの看守のおじいさん。あの人だけが私の話し相手だったもの」

「……」

「でも、そんな理由でもいいから、早く誰かが来ないかなって思っていたのよ。……実は、
あなたが三人目」

「三人目？」

「私の旦那様って言って、連れて来られた人よ。でも、前の二人は私を見て逃げ出し
ちゃったの。仕方がないわ……私、汚くて醜かったもの。二人共そう言って逃げ帰ったの
よ。旦那様は凄いわねえ。私の鎖を外して、こうやってここへ連れて来てくれたんだもの」
彼女はカップを両手で持ったまま、僕の方を見てクスクスと笑った。

そしてその後には小さくあくびをして、うとうとし始めた。

僕がカップを受け取ると、彼女はくんと横になる。

「そろそろ……眠るかい？」

「……ええ」

僕もやつと眠れそうだ。

灯を消し、ベッドに入る。僕はベルルに背を向けるように横になったが、彼女が僕の背
に身を寄せて眠った為、少し緊張した。

しかしまあ、それほど気を張ることもないのかもしれないと思ったりもした。

ゆっくり、夫婦らしくなっていけばいい。

まだ僕たちは、お互いのことを何も知らないのだから。

2 王都

翌朝、僕は王都の商店街へ、ベルルと共にやって来た。

まず彼女の体に合う服を数着買ってあげたいと思っていたが、正直女物の服の善し悪し
や、流行の店なんてのはよく分からない。

この僕だぞ。分かる訳がない。

一方、ベルルは初めての王都ということで、瞳をきらきらさせてはしゃいでいた。何も

かもが珍しいのだろう。

「凄いわね!! なんて賑やかなの!!」

彼女は色々なショーウィンドウを眺めながら、あちこちへ行っていた。

しかしこれまたぶかぶかの靴を履いていたので、タイルの窪みに引っかけかかって転びそうになったりする。

「ほら、危ない」

すかさず僕が、彼女の腕を取って支えた。

何と云うか、彼女はまるで子供のようだ。

「やはり、体に合った服や靴が必要だな」

「……旦那様、あのお洋服、凄く綺麗だわ」

ベルルは僕に腕を掴まれたまま、声を弾ませ、ある店のショーウィンドウに飾られている洋服を指さす。

金色のボタンがついた、エメラルド色の普段着用のドレスだった。

確かに美しい色だが、隣には若い子の間で流行中らしい桃色のドレスもあった。それなのに、ベルルはなぜこちらを選んだのだろうと少し不思議にも思う。

まあ流行を敏感に察知出来る場所にいた訳でもないから、当然と言えば当然か。

「あの店に行ってみるか」

「うん!!」

ベルルは瞳を輝かせ、僕の手を取る。

少々驚いたが、好き勝手にあちこち行かれるよりいいか。

「あらまあ、あなたがなぜ女物の服屋に？」

「げ、オリヴィア・レッドバルト」

店に入るや否や、王宮魔術師として同じ魔法薬研究室に所属している同僚オリヴィアに出くわした。

深い赤茶色の髪を後ろで結った、つり目の風貌。僕とは学生時代からの仲である彼女は、騎士の名家レッドバルト家に嫁いだ若奥様だ。

オリヴィアは僕の隣に居るベルルを見てギョツとしていた。一方のベルルはきょとんとしている。

「えつと……その、ベルル、こちらは僕の仕事仲間のオリヴィア・レッドバルト。レッドバルト家の若奥様でもあるんだ」

「……?」

まあ、多分よく分かっていないだろうけれど。

ベルルはニコリと笑って「こんにちは」と挨拶をする。

「オリヴィア……えっとその、この子は僕の、妻になる……その、ベルルロットだ」
オリヴィアは多分驚いていたのだろうが、すぐに手を差し出してニコリと笑った。そしてベルルと握手をしたまま、僕に問いかけてくる。

「あなたが結婚するって噂、本当だったのね」

「……噂になっているのか」

「ええ。前に婚約者に捨てられた傷心のせいで、もう一生独身貴族を貫くんじやないかって心配されていたあのリノフリード・グラスミスが結婚するらしいって、研究室で噂になっていたのよ」

「お、おいオリヴィアッ!!」

オリヴィアの口から前の婚約者の話題が出て焦った。僕に婚約者がいたことは、まだベルルには言っていないのだから。

普通に考えて、夫となる男の前の婚約者の話など、このようなところで知らされたくはないはずだ。

オリヴィアもとっさにそれを悟ったようで、一瞬口を押さえる。

しかしすぐに機転を利かし、別の話題をふってきた。

「え、えっと。何、もしかして奥様に新しいドレスでもってこと？ ベルルさん、お気に召したものがあらかしら？ この男だけでは少々不安でしょうから、私、一緒に選んであげますわよ」

それを聞いたベルルはワツと嬉しそうな顔になると、先ほどのエメラルド色のドレスを指さした。

「ショーウィンドウに飾られていた、あのドレスだ。オリヴィアは「ほー」と感心して、腕を組む。

「ベルルさんはお若いのに、なかなかお目が高いわね、リノ。若い子はみんな、桃色のフリルのついたドレスを選ぶのに」
「……この子は箱入りだったんだ。あまり流行に詳しくない」

「きつとお育ちがいいのね」

オリヴィアは店員を呼ぶと、ベルルにその服を試着させるように伝えた。

ベルルは試着室に入るのを少し怖がったが、僕が「大丈夫」と言うと、大人しく従う。四角い小さな部屋が、あの牢屋を彷彿させたのだろうか。

店内のテーブルで待っていると、オリヴィアが妙にニヤニヤした顔で僕を覗き込んだ。

「ねえねえ、いったいどのお嬢様なの？ すっごく美人な子じゃない」

「……それは、内緒だ」

「なによそれ、変なの」

「ちょっとした魔術の家柄のお嬢さんだ」

当然、僕は嘘を答える。彼女が魔王の娘であることは、王宮の限られた人物しか知らない。それにしても、新婚かあ。いいなあ……私もあの頃に戻りたいわ」

「……何を言っている。年がら年中、新婚のようなものじゃないか、君たちは」

僕はこのオリヴィアの旦那、ジェラル・レッドバルトとも交流があるが、この二人が結婚して約五年、いまだにその熱が衰える気配はない。

「それでも新婚は特別よ。結婚式を挙げて、新婚旅行に行つて……あなた、ちゃんと指輪は用意したの？」

「……え」

指輪？

それは結婚指輪ってことか？

それとも婚約指輪？

「何あなた、お嫁さん貰っておいて、用意してないっていうの？」

「い、いや、僕らはあんまり結婚を公にしない方向でいくつもりと言うか。式も挙げる予定はないし、指輪って……」

すっかり忘れていた、とは言えない。

オリヴィアは呆れ返った表情だ。

「あなたね……いや……はあ？ あなたそんなだから、つまらない男って言われるのよ。」

ベルルさん、まだ若いんだからあなたがしっかりしないとダメじゃない」

「は、はあ」

「指輪は高価なものじゃなくてもいいのよ。そりゃあ、良いものをあげることで愛の大きさを示すってタイプも居るけど。うちの旦那みたいに」

確かにオリヴィアの指には、いつもとても高価な指輪が当たり前のようにはめられている。

「あなたの家は、お世辞にも余裕のある状態じゃないだろうから、そこは仕方がないとしてもね。指輪は証であり戒めよ。夫婦として、しっかりやっていこうっていう意識を持つきっかけになるのよ」

なるほど。彼女の言葉には少々納得する部分もある。

「あのお、お客様。ご試着が終わりました」

店員が試着室のカーテンを開く。

すると、先ほどショーウィンドウに飾られていたエメラルド色のドレスが、ぴったりとベルルの体を覆っている。

何と言っても、彼女の黒髪とよく合う。まさに彼女の為に作られたものだと思えるくらい似合っている。

「まあ……まあやだ。なんて美しいの!! 私がお持ち帰りしたい!! 天使よ天使!!」

オリヴィアは興奮した様子で手をワキワキさせながらベルルの周りを回っている。危ない女だ。

当のベルルはオリヴィアの危なさをよく分かっているようで、「ピッタリね！」と嬉しそうに袖をヒラヒラさせている。

「旦那様、どう？」

そして、少し心配そうに僕を見上げて様子を窺う。

いやはや、その視線は卑怯だ。

「……買います」

買うしかないでしょう、これはもう。

良い値段だが、恐ろしい程後悔はしていない。

ベルルはそのドレスがとても気に入ったようで「ありがとう旦那様」と、満面の笑みを浮かべる。

「でもそれだけじゃダメね。靴や髪飾りも買わないと」

「……オリヴィア、何か良いものを選んでやってくれないか」

「勿論」

彼女は指をグツと立てると、楽し気に、でも真剣に店の中から色々な小物を持つてくる。ドレスに合う深い緑色の細身の靴や、白く艶のある靴、更にコサージュのついた髪飾り

をパパッとチョイス。女の人って凄いな。

ベルルはどれもこれも美しいと言って、そのひとつひとつを眺めている。

「……全部下さい」

仕方がない、全部買いますとも。全部買いますとも！！

オリヴィアは「よっ男前！！」と囁し立てる。

王宮から援助金もいただいているのだから、このくらい当然買わせていただきますとも。ここ最近、金にシビアになっていたから、若干ビクビクしたけれども。

店を出ると、オリヴィアは研究室に寄ると言って、僕らと別れた。

「面白い人ね、オリヴィアさんって」

「ああ、まあ……おせっかいな人だよ、昔から」

「昔からの知り合いなの？」

「魔法学校での学生時代、同じ班だったんだ。と言うか、オリヴィアは班長だったんだ。他にも班員は居たが……王宮魔術師として同僚になった者も多いな」

同期ということもあって、オリヴィアとの付き合いは長い。

ここぞという時に頼りになる人だ。僕も家が大変な時、色々世話を焼いてもらい、励ましてもらった。

「それはそうと、少し疲れたんじゃないか、ベルル」

「……お腹が空いたわ」

「だろうな。僕もだ」

ベルルがポツリと正直に呟いたのが、何だか妙に面白かった。



その後僕らは小さなカフェに寄って、昼食を取った。

ベルルはカフェで出たパンやスープ、サラダやキッシュをとっても美味しいと言っていたが、やはり小食である。

昨晚の我が家でもそうだった。地下牢の生活では、あまり多く食事を取っていなかったのかもしれない。サフラナいわく、ゆっくり食事に慣れていけば良いということだった。

無理矢理沢山食べさせるのも良くない。しかし好き嫌いなく何でも美味しいと言ってくれるので助かっている。

「旦那様、今からどうなさるの?」

「ああ……まだ時間はあるし、行きたい場所はあるか?」

「……?」

「ある訳ないよな」

当然である。彼女はこの王都を知らないのだから。

そもそも、きつとこの国のほとんどの場所に馴染みがないのだろう。

「だったら、僕の用事を済ませてもいいかい? 王立の植物園に行きたいんだ」

「旦那様の行きたい所? だったら私も行きたいわ。旦那様の行きたい所に行きたいっ!」

買ったばかりの服と靴を纏って、楽しそうにそう言う少女。

良く似合っている、本当に。

それをちゃんと口に出せばいいのだろうけれど。

この少女が自分の妻となったのか……

まじまじと見て考えていると、ベルルと目が合ったので思わず咳払いをする。

彼女はただニコニコと笑っていた。

僕は王宮の魔法薬研究室に所属している王宮魔術師だ。

王立の植物園というものが王都セントラル・リーズにあるのだが、仕事柄そこにはよくお世話になっている。植物園には世界の植物が集められ、様々なグループに分けて栽培されている。一般人も入場出来る施設なのだが、魔法薬に使う特殊な薬草や香草は、王宮魔術師のライセンスカードがなければ入れないゾーンに植えられている。

「わあああ……凄い」

ベルルは植物園に入るや否や、感嘆かんだんの声を上げた。

ガラス張りの大きな施設は、設備が整っている上、造形的にも美しい。噴水も数多く設置されていて、観光名所の一つとなっている。

ベルルは王都の町並みを見て回っていた時はしゃぎっぷりとは裏腹に、静かに且かつ熱心な様子で植物を見ていた。

地下牢に居たせいで、あまり植物を見たことがないのだろうか。

「植物が珍しいか？」

そう聞くと、彼女はコクンと頷く。

「でも……懐かしい気もするの」

緑色のドレスが周りの植物たちと調和していて、彼女もまた美しい花を咲かせた植物のようだ。

今日は休日だからか客がとても多い。どこか不安そうにしていたベルルは、僕の腕を探し、身を寄せる。

「……人ごみが怖いのか？」

「……うん」

「それもそうか。こんなに多くの人が集まったところは見たことがなさそうだもんな」

僕は出来るだけ人ごみから離れ、急いで葉草のゾーンに向かった。

あの場所なら、今日も人は少ないはずだ。

王宮魔術師である僕は当然、王宮魔術師専用の特殊ゾーンにいつでも出入り出来る。

そして僕が付いていれば、ベルルも同様に見て回れる。

「……ここにも植物があるの？」

別館にある特殊ゾーンへ向かう通路で、彼女は僕を見上げて聞いた。

「沢山あるとも。うちの庭にも植物は多く植えてあるが、ここにしかない異国の葉草もあるからな。今日は苗なまこを少し買いに来たんだ」

中に入ると、案の定、人は居なかった。王宮の研究者も、わざわざ休日ここへ来ることは少ないのだろう。

「わああ……」

ベルルは瞳を見開き、一度大きく息を吸った。

「一気に空気が変わったわね」

「人が居ないからな」

僕はまたつまらない返事をする。

「もう旦那様ったら、そういうことじゃないわっ!! ……魔法があちこちに満ちていて、

空気が澄すんでいるのよ」

しかしそれを後悔する暇もなく、ベルルはどこか興奮した様子で続ける。

「ほら、右から……すーっと流れていて……下から上に向かって、ずーっと……」

「……??」

ベルル……君には何が見えているんだ。

僕のお目当ては、最近僕が研究している魔法薬に必要な青星あまほしシダシダという変わった植物の苗だった。

我が家の庭にも僅わずかに生はえているのだが、もう少し増やそうと考えたのだ。

このゾーンを進むうちに、ベルルはふと足を止める。

とある木が気になったらしい。

「ああ、その木か。月光樹げいこうじゆだよ。とても貴重な木だが、我が家にも小さなものがある。ここのはよく育っているだろう」

「青い小さな花が咲いているのね。私、あの木の花を見たことがあるわ」

「……まさか。地下牢ぢかろうにあの木があった訳ではないだろう」

「うん。でも、この香り……知っている気がするの」

ベルルはただただ、月光樹を見つめていた。

「……その、東の最果ての国に居た時に、見たのか？」

「……分からない。私、どこで見たんだっけ……」

月光樹は樹冠が大きく、香りの良い花を咲かせる木だが、貴重なのはその葉の方で様々な薬の調剤に用いられる。花の方が薬の調剤に使われた例は今のところないが、研究者たちが熱心に研究している分野でもある。

古い神話によく出てくる聖なる木としても有名な木だが、とても貴重な木だから、実際に見たことのある者は少ないのではないだろうか。

彼女がじっくりその木を見つめていたので、ついついその様子を横目に確認していると、あるものが目に入り思わずギョツとした。

彼女の周りに、何か小さなものが沢山居る。姿形も様々な、謎の存在。

それは何と、植物に宿っている妖精たちだった。

僕もたまに見つけることがあるが、一度にこんなに沢山見たことはなかった。基本的に妖精は人に近寄らないものなのである。

「べ……ベルル……っ……君の周りに妖精が……」

ベルルは「わっ」と跳び上がって僕にしがみついていた。

妖精たちは可愛い容姿のものから不細工ぶさいくなものまで多種多様。そのどれもが、ベルルがいくら離れようとしてもまたすぐに寄ってくる。不思議だ。

しかしベルルもそれらが妖精たちだと分かると、すぐに笑顔になってしゃがみ込み、妖精たちに向けて手を伸ばしたりする。

「ベルル、妖精を見たことがあるのか？」

「ええ。地下牢にもたまに迷い込んで来たわ。……そうだ、思い出した。その時の妖精が、あの木の花を持って来てくれたんだわっ！」

「月光樹の花を？」

「そうよ。いい香りだったから、私それを大切にしていたの。すぐ枯れちゃったけれど……」

昔、どこかの偉い教授に聞いたことがある。

魔術師の中には、妖精に好かれて仕方がない者が居ると。

そういった者は稀で、特別の中の特別であり、時代を変える存在になりうると。

驚いたと言ふより、やはりと言った方がいいのかもしれない。彼女は魔王の娘なのだから。

「おお、リノフリードか。今日は何を買っていくかね」

そんな時、魔法薬草のゾーンを管理している専任庭師のガスパール・ロジェが現れた。

王宮から特別に派遣されている彼は、以前は王宮魔術師だった男だ。七十八歳と高齢ながら、いまだに薬草と関わり、現役を買っている。

立ち読みサンプル はここまで

「……青星シダの苗を三つ程。……あと、月光樹の枝を一本くれ」

「おんや、お前さんが月光樹の枝を買っていくとは珍しい。グラスの庭には月光樹があつたと記憶しているが」

「あるにはあるが、まだ花が咲いていないんだ……」

ガスパールは僕の脇にちょこんと居るベルルを見て、目を細めた。

「はて、そこのお嬢さんをご親戚か何かかね？ 姪っ子さんとか？」

「……僕の妻だ」

僕の答えに、ガスパール爺さんは口をあぐりさせた。以前から、「僕はもう結婚することはないだろう」と愚痴をこぼしていた相手でもあるから。

そしてベルルと僕を見比べる。

「お前さんいつの間に……しかもそんなに若くて綺麗なお嬢さんを」

「いいからさっさと用意してくれ」

「お嬢さん、お名前は何と言うのかね」

僕を無視したガスパールは、ニヤニヤ笑ってベルルに名を尋ねた。

ベルルはニコリと笑って、「ベルルロットよ」と答えている。

「なんてまあ、美しい黒髪だろうね。ドレスもよく似合っておる」

「旦那様が今日買って下さったのよ、お爺様」